

あみださんぞんぞう
常楽寺の阿弥陀三尊像

(東京都指定文化財)

稲城市東長沼2111

☎0423-78-2111

発行 1995.3.20



常楽寺の阿弥陀三尊像

東長沼にある天台宗の古刹常楽寺には、東京都指定文化財の阿弥陀三尊像が安置されています。山門をに入って右手に建つ阿弥陀堂（本堂）の中であって、高勝寺観世音菩薩像とともに市内でも最も古い仏像として知られています。

三体の仏像は、ともに檜材の寄木造りで、像高は、中尊阿弥陀如来坐像78.4cm、右脇侍観世音菩薩立像92.7cm、左脇侍勢至菩薩立像92.3cmです。

中尊の阿弥陀如来坐像は、右足を上にした結跏趺坐（両足を交差させて組み、両足の甲をそれぞれの反対側の股の上に乗せて坐ること）の型で、右手は掌を前に向けて第一・二指をまげ、左手も掌を上に向けて第一・二指をまげています。螺髪（如来像の頭部につけられた粒状の卷毛）は切付けで、眼は彫眼で付けられています。衲衣は右肩から腹部にかかり、大腿部から脚部を包んでいます。全体に布下地の上に漆箔（漆を塗った上に金箔を置くこと）がほどこされています



常楽寺阿弥陀堂

が、胸部は下地とともに漆箔の剥落が目立ちます。

構造は頭部体部を一木から彫り出し、三道（首にある三本の溝）の下で割首（首の下でノミを入れて頭部と体部を割り放すこと）をし、内割り（像内部を削り取ること）をほどこしています。頭部の耳のうしろ部、体背面、右腕の肩・肘・手首、左腕の袖口と手首で別材をはぎ合わせています。

伏目のおだやかな表情などに藤原時代の特色を見ることができますが、螺髪がやや大粒なこと、衣文線がやや密で、大小のひだを交互に刻み出す等の点に古い様式を残しています。制作年代は12世紀前半頃の地方作と考えられます。

阿弥陀如来像の左右に置かれる両脇侍は、観世音菩薩像と勢至菩薩像で、ともに立像です。右脇侍の観世音菩薩像は台座上に直立し、右手は掌を前に向けて垂下し、左手は曲げて蓮華を持っています。頭部は宝髻（まげ）を結び、眼は彫眼で作られています。条帛（肩から脇にかける布）と天衣をまとい、腰より下は裳をつけ腰布を付けています。全体的に布下地に漆箔をほどこしています。

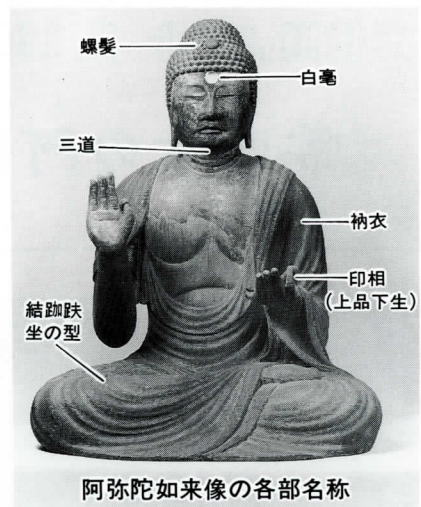
構造は耳のうしろと踵のうしろを結ぶ線で前後にはいで、内割りをしています。

左脇侍の勢至菩薩像は、右手を掌げ左手を垂下して立つほかは、観音像とほぼ同じ形態・構造をしています。持物と天衣の遊離部、足先は、両像ともに後世になって作ったものと考えられます。

両脇侍ともに技法や顔の表情、特に下脛の線が不明瞭なところなどが中尊と共通しており、中尊と一具の作とみられます。

調査では、中尊像内に納入されていた修理銘木札5枚のうちの1枚に「承応三年十月、仏師山口庄平衛」の墨書銘が確認されています。江戸時代初期の承応三年（1654）に修理が行われたことが知られます。

三体ともに若干整形の美を欠くところもみられますが、形態のとり方、体部、衣文などはよく整い、技巧的に優れた地方作の仏像といえます。



阿弥陀如来像の各部名称



阿弥陀堂に安置された三尊像



阿弥陀如来坐像